「聞いておくれよ、マクレーン」

富田　健裕

登場人物

頼我 堅一（３１）・フリーター

マクレーン・堅一の部屋に置かれた冷蔵庫（想定・４０代後半の声）

頼我 太助（２７）・会社員・堅一の弟

頼我 恵（５３）・主婦・堅一、太助の母

頼我 美空（２５）・主婦・太助の妻

岡島 徹（６４）・ダイニングバー『小悪党』店主

野崎 和馬（２１）・フリーター

佐山優佳（２８）・フリーター・堅一の元恋人

赤嶺 翔太（４０）・作業員

朝倉 愛（３７）・風俗嬢

田所渉（３６）・家電量販店 店員

武山 巌（５５）・会社員・恵の婚約者

○繁華街・道中（夜）

ポケットに手を突っ込んだまま歩く頼我賢一（３１）。

すれ違う人々が次々に堅一をよけ続ける。

堅一、スマホを眺めながら歩いて来る女子高生を目に留め、立止る。

女子高生、目の前で堅一に気付き、怪訝な表情を浮かべてすれ違う。

堅一、再び歩き始める。

○ダイニングバー『小悪党』・厨房（夜）

流し場で洗い物をする野崎和馬（２１）。

フロア側から岡島徹（６４）が顔を出す。

岡島「チーズハンバーグと海藻サラダ、ゆっくりで良いからやってみようか」

野崎「はい」

裏口の扉が開き堅一が入って来る。

岡島「おはよう」

堅一「おはようございます」

堅一、岡島に向かって軽く頭を下げ、野崎に目を留める。

岡島「この前話した、阿久津さんの紹介の」

堅一「ああ」

野崎「野崎です」

堅一「頼我です」

野崎「宜しくお願いします」

堅一、野崎に向かって軽く頭を下げる。

岡島「まあ、仲良くやってよ」

岡島、フロアに出て行く。

堅一、ゆっくりと着替えを始める。

野崎、メモ帳と伝票を両手に慣れない手付きで冷蔵庫を物色し始める。

堅一、野崎から伝票を取り、確認すると、手早く腰にサロンを巻き付け、野崎を押し退ける様にして冷蔵庫から野菜を取出す。フライパンに油を引き、コンロに火を着けると、再びまな板に移り野菜を切り始める。一連の動作が素早い。

野崎、堅一の姿を只々見ている事しか出来ない。

○同・店内フロア（夜）

レトロアメリカン調の店内。カウンターが十席程、その後ろにはボックス席が数席。こじんまりとした店内に客の姿はまばらである。

カウンター内で手持無沙汰な様子の野崎。

岡島、ボックス席に座る客の注文を聞くと、カウンター内の野崎に向かって、

岡島「野崎くん、生二つ」

野崎「あ、はい」

野崎、カウンター内の棚からジョッキを二つ手に取り、ビールサーバーのレバーを握る。

厨房から出て来た堅一、野崎の手からジョッキを奪うと、冷蔵庫の中から冷えたジョッキを二つ取出し、サーバーからビールを注ぐ。泡の量の調節が入念。

野崎、その様子を只々見ている。
堅一、ジョッキ二杯のビールを注ぎ終え、ボックス席に目をやると、カップルが肩を寄せ合い話している。
岡島、カウンターに戻って来る。
岡島「タバスコ入れてやってよ」
岡島、悪戯に笑みを浮かべると、ジョッキ二つを手にカップルのもとへ。
堅一「クソ共が・・・・」
堅一、厨房へ戻って行く。

○同・厨房内（夜）
堅一、厨房へ戻って来ると、業務用冷蔵庫に一発蹴りを入れる。

○同・店先（深夜）
店のシャッターが閉じ、看板の電気が消える。
堅一、裏口から出て来てスマホを取出す。
画面には『不在着信・頼我太助・三件』

の表示。

堅一、不在着信を無視して０３から始まる番号へ電話を掛け始める。

○アパート前・外観（深夜）

二階建ての古びたアパート。上下階にそれぞれ四戸ずつの扉が並び、錆びた鉄階段が伸びている。

堅一がアパート前に差し掛かると、鉄階段に腰掛ける頼我太助（２７）の姿を目に留める。

太助、堅一に気付き重たく腰を上げる。

太助「電話、出てくれよ」

堅一「何だよ？」

太助「実家に顔出してくれ」

堅一、無言のまま鉄階段を上って行く。

太助、堅一を追う様に上って行く。

太助「兄貴！」

○アパート二階廊下（深夜）

堅一、太助を無視して二階奥の部屋へ向かう。

太助「聞けよ」

太助、鍵を開けようとする堅一の手を掴んで、

太助「母ちゃんもうすぐ籍入れるんだってよ」

堅一「知るか」

太助「良い機会なんだよ、聞いてくれよ」

堅一「帰れ」

堅一、太助の手を振り解く。

鉄階段を上がって来るハイヒールの音。

見るからに風俗嬢の出立をした朝倉愛（３７）が二人のもとへやって来る。

愛「六〇分コースの頼我さん？」

堅一「・・・」

太助「・・・」

愛「・・・どっち？」

〇アパートの一室・堅一の部屋内（深夜）

１Ｋの部屋。

堅一、居間に敷かれた布団の上に胡坐を
かき煙草を吸っている。
玄関に太助と愛。太助が自分の財布から
二万を愛に渡す。
愛「朝っぱらから３Ｐかと思ったわ」
太助「すいません・・・」
愛「まあ、そっちが良いなら私は別に」
太助「・・・すいません」
愛「弟、なかなかイケメン」
太助「・・・いやいや」
愛「家は？近いの？」
太助、左手の指輪を愛に見せて、
太助「いや、僕は、これなんで」
愛、自分の鞄から風俗用の名刺を取出し、
愛「一応、渡しとく」
太助、渋々と名刺を受取る。
愛「基本的に私なんでもアリだから。あ、で
もゴムはそっちで用意してね」
太助「ああ・・・はい」
愛「出来の悪い兄貴持つと大変だね」

太助「本当ですよ」
堅一「・・・」
愛「じゃっ、またのご利用お待ちしてまーす」
愛、部屋を出て行く。静寂。
太助、ふと玄関の靴に目を落とし、
太助「兄貴、今・・・」
堅一、太助に二万を投げつける。
太助「・・・」
堅一、煙草を消し、キッチンまで歩いて
行くと料理を始める。

○アパート二階廊下・堅一の部屋の前（深夜）
部屋の扉が開き、太助が出て来る。
太助が部屋の中を振り返り一人で食事を
する堅一の姿を見て静かに扉を閉める。

○堅一の部屋内
布団で寝ている堅一。
卓袱台の上には空になった皿と丼。
堅一、目を覚まし、布団を出る。

×　×　×

堅一、キッチンで食器を洗い、出しっ放しになっていた醤油の瓶を手に冷蔵庫を開けようとすると、冷蔵庫のドアにマグネットで張り付けられた二万を目に留める。じわじわと怒りが込み上げ、冷蔵庫に一発蹴りを入れる。

○頼我家・実家前

年季の入った一軒家。家の前に軽自動車が停まっている。

助手席から頼我美空（２５）が降りて来る。大きくなったお腹を気遣いながら、ゆっくり玄関まで行き、呼び鈴を鳴らす。

家の中から頼我恵（５３）が顔を出す。

恵「美空ちゃん、いらっしゃい」

美空「ご無沙汰してます」

恵「入って入って」

太助、運転席から降りて来る。

恵「おかえり」

太助、恵に軽く手を振る。
恵、美空を支えながら家の中へ入る。
太助、後に続こうとすると、背後から肩を掴まれる。振り返ると、堅一の姿。
太助「えっ！？」
堅一、手にした二万を太助の口に捻じ込もうとする。必死に抵抗する太助。
二人は縺れ合いながら倒れ込む。
マウントを取った堅一、口が駄目ならと太助の鼻に二万を捻じ込む。
太助「痛い痛い痛い！」
堅一、太助の口が開いた隙に二万を口に押し込む。何も言えなくなった太助の胸倉をつかみ、
堅一「俺は誰の世話にもならねえ」
堅一、立ち上がると踵を返して歩き出す。
太助、ふらふらと立ち上がり、二万を吐き出すと、堅一の背中に向かって、
太助「死ぬまで燻ぶっとけクソ兄貴！」
堅一、思わず振り返る。

家の中から恵が出て来る。
堅一と恵、遠目に目が合う。
恵、太助の肩を抱いて家の中へ入る。
堅一、怒りの形相で歩き出す。

○繁華街・道中（夕方）
堅一、缶ビールを飲みながら、ふらふらと歩いている。飲み干し、缶を地面に叩きつける。

○居酒屋・店内（夜）
堅一、一人カウンター席で日本酒を煽りながら、賑わう店内を見渡す。
合コンで盛り上がる八人の男女、語り合っているスーツ姿の四人組男女、自分たちの世界に入り込んでいるカップル、談笑する四人家族。
堅一、それぞれを睨みつける様に見ると、やがて項垂れる。

○堅一の部屋内（夜）〜（朝）

堅一、泥酔のまま帰宅する。冷蔵庫を開け、ペットボトルを取り出すと、勢いよく扉を閉める。

水を飲み、やや酔いが落ち着いてきた堅一、ふと冷蔵庫を見詰める。しばらく、睨み合うかの様に見詰めている。見る見る内に眉間に皺を寄せ、何気なく、

堅一「何見てんだよコラ・・・」

堅一、冷蔵庫を睨み続ける。

堅一「見てんじゃねえぞコラァ！」

堅一、冷蔵庫に蹴りを入れる。

冷蔵庫（台詞時以下、マクレーン）より声。

マクレーンの声「痛いのうワレェ！」

堅一「・・・」

マクレーンの声「何でワシが毎度毎度お前から蹴り喰らわなアカンのじゃコラァ！？」

堅一「・・・アァ？」

マクレーンの声「オンドレ、こっちが冷蔵庫や思うて舐めとったらホンマにイテまうどコラァ！」

堅一「テメェ誰に向かって口利いてんだコラァ！？」

マクレーンの声「お前じゃボケェ！ワシん中のナマモン全部ドロドロに溶かしたろかコラァ！」

堅一「やれるもんならやってみろコラア！」

マクレーンの声「ビールから何から全部、常温にしたるぞコラァ！」

堅一「うるせえんだよ、ガラクタ！」

堅一、冷蔵庫に強烈な蹴りを入れる。

マクレーンの声「貴様また蹴りよったな！」

堅一「ああ畜生！」

堅一、居間の布団に向かう。

マクレーンの声「どこ行くねん！まだ話終わってないぞ！」

堅一、居間の布団に入る。

マクレーンの声「お前いつか絶対泣かしたるからな！覚えとけよコラァ！」

堅一、布団の中で必死に目を瞑る。

×　×　×

朝。堅一が布団の中で目を覚ます。頭痛に顔を顰め、ゆっくり体を起こす。キッチンに目をやると、キャップが開いたままのペットボトルが冷蔵庫の前に置かれている。重たく立ち上り、キッチンへ。ペットボトルを拾い上げ、冷蔵庫を見詰める。水を一口飲み、冷蔵庫全体を確かめる様に見回すと、ゆっくりと扉を開け、ペットボトルを中にしまう。確かめる様に冷蔵庫の中を見回した後、ゆっくりと扉を閉める。しばし冷蔵庫を見詰めると、布団に戻ろうとする。

堅一の背後に向かいマクレーンの声、

マクレーンの声「許して貰うたと思うなよ」

堅一、驚愕の表情で冷蔵庫を振り返る。

堅一「！？」

×　×　×

堅一、スマホを耳に当て、

堅一「うちの冷蔵庫の様子がおかしいんです、今すぐ来て下さい」

×　×　×

作業服姿の赤嶺翔太（４０）が冷蔵庫の裏を確認している。やがて、

赤嶺「特におかしな所はないですけどね」

堅一「もっとよく見て下さい」

赤嶺「具体的に、どの様な不具合が・・・」

堅一「何て言うか・・・ガタガタうるさいんですよ」

赤嶺「・・・変な音がすると？」

堅一「まあ、そんな所です」

赤嶺「どんな感じでした？」

堅一「何か、凄ぇ偉そうで、生意気な感じ？」

赤嶺「・・・」

堅一「何すか？」

赤嶺「ああ、いや・・・」

赤嶺、考え込んでしまう。

堅一「まあ、こっちも酒入ってたから感情的になってたってのもありますけど、マジあれは無いわ」

赤嶺「・・・・」

○アパート二階廊下・堅一の部屋の前

堅一の部屋の戸が開き、赤嶺が出て来る。

見送る堅一。

赤嶺「まあ、今日の所は様子を見て、また何かあったらお電話ください」

堅一、赤嶺に軽く頭を下げ、戸を閉める。

歩き出す赤嶺、静かに舌打ちを一回。

○堅一の部屋内

堅一が冷蔵庫を睨みつけながら、

堅一「なに黙ってんだよ、オイ？」

冷蔵庫に変化はない。

堅一「逃げてんじゃねえよ、何とか言ってみろよ？」

冷蔵庫の戸が独りでに開く。

堅一「・・・」

堅一、冷蔵庫の戸を閉める。

再び冷蔵庫の戸が独りでに開く。

堅一「・・・喧嘩売ってんのか、お前？」

堅一、冷蔵庫の戸を強めに閉める。

再び冷蔵庫の戸が独りでに開く。

堅一「ああ！何なんだよ、お前！」

×　×　×

堅一、ガムテープで冷蔵庫をぐるぐる巻きにすると、鞄を手に部屋を出て行く。

○パチンコ屋店内

堅一、煙草を吸いながらパチンコを打っている。手元の灰皿は吸殻の山。

○ダイニングバー『小悪党』厨房内（夜）

厨房で乱暴に洗い物をする堅一と、慣れない手付きで食材の仕込みをする野崎。

堅一、洗い物を終え野崎に目をやる。野崎の不器用な手付きに顔を顰め、

堅一「どけ！」

堅一、野崎を押し退け食材の仕込みを始める。

岡島がフロア側より顔を出し、

岡島「サラミピザ、チキンステーキ」

堅一、手早くフライパンをコンロにかけ油をひく。

岡島「野崎くん、生とハイボール！」

野崎「あ、はい・・・」

堅一、厨房を飛び出しフロアへ。

野崎、立ち尽くすばかり。

○堅一の部屋内（深夜）

堅一が帰宅し、部屋の電気をつけると、冷凍庫から水が流れ出し、冷蔵庫の付近が水浸しになっている。

堅一、慌てて冷凍庫と冷蔵庫の扉を開ける。

堅一「ふざけやがって・・・」

×　×　×

堅一、冷蔵庫の中身をゴミ袋に入れ、牛乳パックやペットボトルの中身を流しに捨てる。

マクレーンの声「別に全部捨てる必要ないやないか、一言詫びれば許したるのに」

堅一「・・・・」

マクレーンの声「まあ、お前に詫びを期待するだけ野暮な話か」

堅一、再び冷蔵庫をガムテープでぐるぐる巻きにすると、部屋を出て行く。

○コンビニ店先・外（深夜）

堅一、弁当の入った袋を手にコンビニから出て来る。

○堅一の部屋内（深夜）

布団の上で弁当を食べる堅一。

○家電量販店・店内・家電フロア

賑わうフロア内。

堅一、冷蔵庫のコーナーをふらふらと歩いている。それぞれ値札を確認し、眉間に皺を寄せる。

堅一、ふと店内を歩くカップルや家族を見る。しばし目を奪われる。

制服姿の田所渉（３６）が堅一に近付き、

田所「冷蔵庫、お探しですか？」

堅一「・・・・」

堅一、田所を無視。

田所「この辺りの物はちょっとお値段張っちゃうんですけど、あちらにはお手頃な物が揃っております」

堅一「・・・・」

堅一、終始無言のままその場を去る。

○アパート前・外観

堅一がアパート前に差し掛かると、背後から優佳の声、

優佳の声「堅一くん」

堅一、振り返ると佐山優佳（２８）の姿。

堅一「・・・」

優佳「・・・久しぶり」

堅一「・・・どうしたの？」

優佳「荷物、残ってるやつ」

堅一「ああ・・・」

○堅一の部屋内

堅一と優佳が部屋に入って来る。

優佳「お邪魔します・・・」

堅一「もともと自分ん家だろ」

優佳「そうだけど・・・」

堅一「ちょっと待ってて」

堅一、居間の奥の押し入れから段ボール箱を持って来る。

堅一「住所教えてくれたら、送るけど」

優佳「大丈夫、自分でやるから」

堅一「・・・そう」

優佳、ふとガムテープの巻かれた冷蔵庫を目に留める。

優佳「壊れちゃったの？」

堅一「うん・・・まあ、壊れたって言うか」
優佳「・・・中古品だったもんね」
堅一「・・・要る？」
優佳「要らないでしょ」
堅一「・・・だよね」
不器用に笑い合う二人。
優佳「横浜だったっけ？」
堅一「うん、横浜のちょっと先」
優佳「あそこ、まだあったよ」
堅一「・・・そうか」
優佳「相変わらずオンボロなやつばっかり並んでたけど」
堅一「・・・すぐ潰れると思ってたけどね」
優佳「そうだね、でも、私あそこ好きだよ」
堅一「うん・・・」
優佳「・・・」
しばしの沈黙。
堅一「・・・優佳、あの」
優佳「ごめん、人待たせてるんだ」
堅一「・・・そっか、気を付けて」

優佳「ありがとう、それじゃあね」
堅一「うん・・・」
優佳「もう物に当たっちゃ駄目だよ」
堅一「・・・うん」
優佳「誰も得しないんだから」
堅一「うん・・・」
優佳「・・・じゃあね」
優佳、部屋を出て行く。
堅一、扉を閉めるが、しばらくして部屋を出る。

○アパート二階廊下
堅一、二階廊下から、段ボールを手に歩いて行く優佳を見下ろす。声をかけようにも、言葉が詰まる。
優佳、アパート前に停まった一台の車に向かって行く。優佳が車に近付くと、運転席から男が降りて来て、助手席のドアを開け、優佳の荷物を受取ると、後部座席に荷物を入れる。

二人が乗り込むと、車が走り去る。
堅一、それを見届けると、静かに部屋に入って行く。

○堅一の部屋内（昼）〜（夕方）
堅一、部屋に戻って来ると、冷蔵庫に目をやり、やがてガムテープを剥がし出す。
×　×　×
夕方。卓袱台に置かれた堅一のスマホに着信。画面には『店長』の文字。
堅一、着信を気にも留めず居間で煙草を吹かしながら窓の外を見詰めている。
冷蔵庫の戸が独りでに開く。
マクレーンの声「堅一、捨て忘れや」
堅一が冷蔵庫に目を向けると、中には缶ビールが一本だけ残っている。
堅一、冷蔵庫の前に座り込み、中の缶ビールを手に取ると、その冷たさにやや驚きの表情を見せる。冷蔵庫の戸を閉め、寄り掛かり、ビールを飲み始める。

○繁華街・道中（夜）

堅一、人込みをかき分けながら歩く。

○ダイニングバー『小悪党』厨房内（夜）

裏口の扉が開き堅一が入って来ると、厨房内で岡本が息付く暇も無い様子で調理をしている。

岡本、堅一には目もくれず、

岡島「遅えよ！何で電話出ないんだよ！？」

堅一、未だ茫然としつつ、

堅一「すいません・・・」

岡島「野崎が辞めたからよ！こっちは一人で全部回してんだよ！」

堅一「・・・」

岡島「早く仕事入ってくれよ！フロア回ってねえんだよ！」

堅一「あ、はい・・・」

堅一、慌てて腰にサロンを巻き付ける。

岡本「あと、お前に客来てるぞ」

堅一「え・・・」

岡本「え？じゃねえよ！先にそっち行ってこい！」

堅一「あ、はい・・・」

堅一、フロアに出て行く。

○同・店内フロア（夜）

厨房から堅一が出て来ると、カウンターに美空が座っている。

美空「あ、お疲れ様です」

美空、堅一に向かって手を振る。

堅一「・・・ああ、どうも」

美空「たまたま、近くまで来たんで」

堅一「弟も？」

美空「ううん、今日は私一人です」

堅一「お酒・・・」

美空「まさか！オレンジジュースですよ」

堅一「ああ・・・」

美空「私だってたまには一人で飲みたくなるんですよ、今はこの子が許してくれないけど」

美空、自分のお腹を撫でる。

堅一「・・・」

美空「この前はすみません、太助が」

堅一「・・・いや」

美空「朝っぱらから押し掛けて・・・お義兄さんも色々忙しいのに」

堅一「いや・・・そんな事ないですよ」

美空「明後日ですって、お母さん」

堅一「・・・そうっすか」

美空「話す気ないですか？」

堅一「いやあ・・・僕は」

美空「お酒強いみたいで、新しい旦那さん」

堅一「・・・」

美空「私も太助も飲めないから、お義兄さん一回付き合って貰えないかなって」

堅一「僕は無理ですよ」

美空「見て来てほしいんですよ、あいつがどれだけクズかって」

堅一「・・・え？」

美空「結婚させたくないんです、私も太助も」

堅一「どういうこと？」

美空、無言のままオレンジジュースを飲み干す。

堅一「・・・酒癖、悪いの？」

美空「まあ、それなりに」

堅一「・・・」

美空「誰かが何か言わないと、お母さんも」

堅一「・・・俺、仕事が」

美空「・・・とりあえず、私は帰ります」

堅一「・・・」

美空「お会計お願いします」

堅一「いや、良いですよ」

美空、財布から千円札を二枚出して、

美空「いやいや」

堅一「いや、本当に、本当に、大丈夫だから」

堅一、美空に二千円を押し返す。

美空「・・・じゃあ、お言葉に甘えて」

堅一「気を付けて、本当に」

美空「タクシー拾うんで。本当、ちょっと考えてみて下さい」

堅一「ええっと・・・」
美空「お義兄さんにしか頼めない話なんで」
堅一「・・・」
美空「行く時、連絡くださいね、ご馳走様でした」
店を出て行く美空を最後まで見送る堅一。
堅一が店内を見回し、客が一人もいなかった事に気付く。
岡島が厨房から出て来ると、近くのボックス席にどっかりと腰を下ろす。
堅一、岡島に何も言えずにいる。
岡島「こっちの歳考えてほしいよね、本当」
堅一「すいません・・・」
岡島「お前じゃないよ、お前もだけどね、野崎くんがさ、連絡の一つも寄越さないで」
堅一「そういう奴だと思ってましたけど」
岡島「・・・どういう奴だよ？」
堅一「それは・・・」
岡島「お前さ、どれだけ野崎くんのこと知ってるの？」

堅一「・・・」
岡島「そういう奴って言うけどよ、どういう奴なのよ？野崎くんは」
堅一「・・・」
堅一、しばらく何も言えない。
岡島「まあ、去る者は追わないけどね、うちは基本的に。そう言えば、あの子一杯もお酒飲まなかったな、ここダイニングバーなんだけど」
堅一「妊娠してるんで」
岡島「そうだったの？何だよ、単に太ってる子なのかと思ってたよ、ハハハハハ」
堅一「・・・」
岡島「あ、申し訳ないけど、今日疲れちゃったから、一日二日休ませて貰うよ」
堅一「・・・え？」
岡島「え？って、電話出なかったの誰だよ？」
堅一「・・・」
岡島「お前がもっと早く来てたら俺の体は今こんな風にはなってないんだよ」

堅一「・・・すいません」

岡島「今年六五なんだよ、こっちは。まあ、また連絡するからよ、鍵だけ宜しく」

岡島、エプロンを外しながら厨房に入って行く。岡島を見送る堅一、カウンターに座り煙草に火を着ける。

厨房の奥から裏口扉の閉まる音。

○堅一の部屋内（深夜）～（朝）

コンビニの袋を手に帰宅する堅一、やや酔っている様子。

冷蔵庫の前に座り、袋から出した缶ビールや紙パックやペットボトルを数本冷蔵庫に入れる。

しばしの沈黙。

堅一「なあ、ちょっと良いか？」

マクレーンの声「どないした？」

堅一「お前、名前はなんていうんだ？」

マクレーンの声「アホか」

堅一「ああ？」

マクレーンの声「冷蔵庫に名前なんかあるかい。まあ、強いて言うならマクレーンかな」
堅一「マクレーン・・・どうして？」
マクレーンの声「俺を作った会社の名前」
堅一「お前はどこで生まれたんだ？」
マクレーンの声「大阪や、口振り聞いてて分かるやろがい」
堅一「好きな物はなんなんだ？」
マクレーンの声「・・・自分、大丈夫？」
堅一「教えてくれないか」
マクレーンの声「好きなもんか・・・まあ、こっちは立場的に来るモノ拒まずの姿勢でおらなあかんからな、特に好きなもんってのはないかな」
堅一「どんな女の子が好きなんだ？」
マクレーンの声「自分、おちょくってる？」
堅一「教えてくれ」
マクレーンの声「株式会社ＡＭＡＭＩのドラム式洗濯機、乾燥機付きのピンク色」
堅一「・・・どうして？」

マクレーンの声「知らん、一目惚れや」
堅一「ハハ、冷蔵庫も一目惚れするんだ」
マクレーンの声「何笑うとんねん、しばくぞ」
堅一「どういう所が良かったの？」
マクレーンの声「知らん、忘れた」
堅一「やっぱり、ピンクっていう色に惚れたのか？」
マクレーンの声「まあ、色は俺好みやったね、あとは、あの全体のフォルム？プロポーション？」
堅一「何だよそれ」
マクレーンの声「あの独特なさ、形がさ、堪らんやん？家電心をくすぐるやん？」
堅一「近未来的な？」
マクレーンの声「そうそう！あの穴が深そうな感じとか」
堅一、手を叩き笑いながら、
堅一「何だよそれ！」
マクレーンの声「お前、アホ言わすな！」
堅一「逆に、こいつは嫌いってのは？」

マクレーンの声「アメリカ製の掃除機全般」
堅一「ええ、何で何で！？」
マクレーンの声「顔が腹立つやんか、あいつら」
堅一「どうして！？」
マクレーンの声「なんか、大国から来ましたみたいな顔してさ、揃いも揃って」
堅一「やべえ、全然分からねえ」
マクレーンの声「アホ！お前、真夜中の家電量販店で一日陳列されてみい、一発で分かるわ、軒並みイエス・ウィー・キャンみたいな顔してんで」
堅一「自分マクレーンじゃねえかよ！」
マクレーンの声「アホぬかすな、こっちは名前マクレーンでも国産じゃ！」
堅一「なあ、マクレーン、お前はどうしてあそこにいたんだよ」
マクレーンの声「どこや？」
堅一「横浜のリサイクルショップ」
マクレーンの声「ああ、あの居抜きの倉庫？」

堅一「そうそう」
マクレーンの声「あれ三年くらい前やんな？」
堅一「確か、それくらい」
マクレーンの声「記憶が曖昧やけどな、とりあえずな、堅一と優佳ちゃんに貰われる前は、奈良の方のリーマンの家におってんな」
気付けば寝ころびながら冷蔵庫と会話をしている堅一。
×　×　×
朝。冷蔵庫の前で寝入る堅一、周りにはビールの空き缶が数本転がっている。
堅一、目を覚まして起き上がる。冷蔵庫を開けると、紙パックのオレンジジュースが入っているのを目に留め、暫く見詰めている。
マクレーンの声「あはん、いやん、そんな、そんなに中を見詰めないで」
堅一「うるせえよ」
マクレーンの声「お前ホンマ酒入ってる時と入ってない時で人格変わるよな」

堅一「・・・」

マクレーンの声「まあ、でも、お前もエエ酒の飲み方知ってるやん、ちょっと前からその姿勢をキープ出来てれば優佳ちゃんが出て行く事もなかったであろうに」

堅一「・・・」

マクレーンの声「あ、ごめん、午前八時のユーモアではなかった？」

堅一「・・・」

マクレーンの声「堅一？どないした？」

堅一「俺は母親に会えるのか？」

マクレーンの声「母親？何や急に？」

堅一「・・・」

堅一、無言のまま立ち上がり、居間へ。

×　×　×

ベランダで洗濯物を干す堅一。干し終えると、その場で煙草に火を着ける。その様子を眺める様に佇む冷蔵庫。

堅一、煙草を吸い終えて戻って来る。

マクレーンの声「オカンに会うて来いよ」

堅一「え・・・」

マクレーンの声「お前がオカンの話したん初めてや、俺にはよう分からんけど、会うて来た方がエエんと違う？」

堅一「・・・」

○アパート二階廊下

堅一が部屋から出て来る。

○頼我家・実家前・外観

実家の家屋を遠目に眺めながら佇む堅一。

しばらくして、その場を立ち去る。

○ラーメン屋・店内

カウンター席でラーメンを啜る堅一。

×　×　×

煙草を吸う堅一、灰皿は吸殻の山。

○頼我家・実家前・外観

実家を遠目に眺めながら佇む堅一。

○喫茶店・店内（夕方）

コーヒーを飲みながら煙草を吸う堅一。

○頼我家・実家前（夜）

堅一、玄関前に立ち呼び鈴のボタンを見詰めている。

背後から恵の声、

恵の声「おかえり！」

堅一、振り返り、恵の姿を目に留める。

堅一「・・・・」

恵「・・・おかえり」

堅一「・・・・うん」

恵「どうしたの？」

堅一「いや、近くまで来たから」

恵「・・・・手ぶらで？」

堅一「・・・・一人？」

恵「一人よ？もうすぐあの人帰って来るけど」

堅一「・・・・」

恵「入りなさいよ」

○頼我家・実家内・居間（夜）

十二畳ほどの日本間。

卓袱台の上に日本酒の瓶とグラスが用意されている。

卓袱台の前に座り部屋の中を見回している堅一に、恵がお茶と和菓子を持って来る。

恵「あんた日本酒飲めたんだっけ？」

堅一「うん・・・知らなかった？」

恵「お父さん、ビール党だったでしょう」

堅一「・・・親父の写真、捨てたのか？」

恵「まさか、しまってあるわよ」

堅一「・・・」

恵「別れ方は酷かったけど、あんたらのお父さんはあの人しかいないからね」

堅一「新しい男は？日本酒なの？」

恵、笑いながら。

恵「新しい男って止めて貰える？」

堅一「他に何て言えば良いんだよ？」

恵「・・・一緒に飲んであげて」

堅一「・・・」
恵「私には出来ないから」
堅一「・・・俺は帰るよ」
恵「そんな事言わないで、先飲んでな」
堅一「え・・・」
恵「あの人も飲んでから帰って来るから」
恵、日本酒の蓋を開けグラスに注ぐ。
堅一、グラスに口をつける。
×　×　×
台所から包丁がまな板を叩く音。
堅一、居間で一人飲んでいる。グラスはあまり減っていない。
玄関から扉の開く音、次いで武山巌の声、
武山の声「おい、誰の靴だよこれ！？」
恵がスリッパを走らせる音が玄関に続く。
恵の声「おかえりなさい」
武山の声「男いんのか、お前！？」
恵の声「ちょっと、飲み過ぎじゃないの？」
武山の声「質問に答えろよ、男いんだろ！？」
恵の声「違う、息子が来てんの」

武山の声「靴が違うだろうが、ようし、俺が
ぶっ飛ばしてやる」
武山の足音が居間に迫り、堅一が立ち上
がる。
武山巌（５５）が部屋に入って来る。
武山「てめえ！」
武山、堅一を突き飛ばす。倒れた堅一に
馬乗りになり胸倉を掴む。
堅一、抵抗しない。
恵「ちょっと！止めて！」
武山「うるせえよ！」
武山、止めに入った恵を振り解き、恵は
尻もちをつく。
恵を見た堅一、すかさず目の色が変わり、
武山を掴み返す。
堅一「てめえ！この野郎！」
あっという間にマウントを取る堅一。
恵「堅一、止めなさい！」
堅一「俺の母親に何してくれてんだコラ
ア！？」

堅一、マウントを取りながら、卓袱台の上にある日本酒の瓶を手に取り、

堅一「そんなに飲みてえなら飲ましたらぁ！」

瓶の先を武山の口に突っ込む堅一。

武山、必死に抵抗する。顔が見る見るうちに日本酒塗れとなる。

恵「堅一！止めて！堅一！」

恵、力いっぱい堅一を突き飛ばす。

堅一、驚き恵を見る。

堅一「・・・」

恵「出て行って！」

堅一「・・・ああ！？」

恵「出て行きなさい！」

堅一、恵を睨みつける。

恵、武山を介抱し始める。

堅一、立ち上がり部屋を出て行く。

○頼我家・実家前（夜）

玄関の扉が開き、堅一が怒りの表情で出て来る。

○繁華街・道中（夜）

堅一、人込みの中、他人にぶつかりそうになりながら歩く。目の前に転がった段ボールを蹴り上げる。

○居酒屋・店内（夜）

堅一、カウンター席でジョッキのビールを煽る。卓上には空になったジョッキが数本。

カウンターに置かれた堅一のスマホに０９０から始まる着信。

堅一、着信を無視して飲み続ける。

○堅一の部屋内（深夜）～（朝）

堅一、虚ろな目付きで帰宅する。

マクレーンの声「堅一くん、お帰りなさい！オカンとの水入らずは楽しめたかな！？」

堅一「・・・」

マクレーンの声「おっと！堅一くんまだ飲み足りないご様子だね！？」

堅一、鞄を放り投げる。
マクレーンの声「そんな堅一くんにはビール
がキンキンに冷えてまっせ！」
堅一「うるせえんだよ！」
マクレーンの声「・・・おいおい、何やねん、
オカンと上手く行かへんかったんかいな？
ちょっと聞かせろや」
堅一「テメエに話す事なんかないんだよ！」
マクレーンの声「そんなこと言うなよ、俺と
お前の仲やないか、ちょっと聞いたるから、
ここ座れって」
堅一「知った様な口叩いてんじゃねえよ！俺
は誰の世話にもならねえよ！」
マクレーンの声「落ち着けって、ちょっとこ
こ来て座れや」
堅一「黙っとけガラクタ！」
堅一、卓袱台の上に置かれたスマホを冷
蔵庫に投げつける。
マクレーンの声「・・・そうか、そこまで言
うなら俺は黙っとくわ、何も言わへん」

堅一「・・・」

マクレーンの声「・・・やっぱ一個だけ言わせて」

堅一、露骨に舌打ちを一回。

マクレーンの声「お前ホンマ勘違い男やで」

堅一「・・・ああ？」

マクレーンの声「・・・」

堅一「どういう意味だよ？」

マクレーンの声「黙ります」

堅一「・・・」

×　×　×

朝。布団の中で目を開けたままの堅一。

冷蔵庫の前に画面にヒビの入ったスマホが落ちている。画面には『頼我太助』『店長』『頼我美空』『０９０～』『０３～』からの不在着信が数十件表示されている。

玄関の扉がノックされる。

外から太助の声、

太助の声「兄貴！兄貴、いるんだろ？」

堅一、しばらく動かない。
ノックの音が止む。
堅一、ゆっくりと体を起こして玄関へ。
扉を開けると、太助が立っている。

○定食屋・店内
四人掛け卓に座り向かい合う堅一と太助。
太助、チャーハンをかき込んでいる。
堅一、煙草を吹かし、目の前に置かれたラーメンに手をつける様子がない。
太助「・・・喰わないのか？」
堅一「・・・何の用だよ？」
太助「近くまで来たんだよ」
堅一「・・・」
堅一、太助を睨みつける。
太助、チャーハンを食べ終え、
太助「美空に会ったろ？店で」
堅一「だから何だよ？」
太助「何て言われたよ？」
堅一「・・・ああ？」

太助「美空に最後、何て言われたよ？」

堅一、咥え煙草のまま、

堅一「忘れた」

太助「行く前に連絡しろって言われたろ？」

堅一「忘れた」

太助「・・・・」

堅一「・・・・」

太助「兄貴さ、何でも自分一人で何とかなる
って思ってるだろ」

堅一「・・・ああ？」

太助「一人で生きてると思ってるだろ」

堅一「・・・だったら何だよ？」

太助「・・・・」

堅一「・・・・」

太助、店の奥に向かって、

太助「すいません、お勘定」

堅一、無言で太助に千円札を差し出す。

太助、堅一の千円を引っ手繰る。

堅一、太助を睨みつける。

太助、会計を終わらせ一人で店を出る。

堅一、しばらくその場に座っている。
ふと店内に置かれたテレビの音が耳に入る、テレビにはアナウンサーの湯川正幸（４７）と安達真央（２７）の姿。
湯川の声「ええ、ちょっとここでお知らせですね？」
真央の声「はい、マクレーン社から入ったお知らせです」
湯川の声「マクレーン社、懐かしいですね、確か冷蔵庫メーカー？」
真央の声「はい、今朝のマクレーン社からの発表によりますと、１９９８年から２００５年に制作された製品に重大な不具合が見付かった為、順次自主回収を実施し、製品の取り換えを行うと発表されました」
湯川の声「重大な不具合？」
真央の声「はい、こちらをご覧ください」
画面が切り替わると、幾つかの製造番号が表示される。画面の一番下にはマクレーン社の電話番号。

真央の声「もし、ただいま画面に表示されて
おります製造番号に該当する製品をお持ち
の方は、速やかにマクレーン社までお電話
をお願い致します」
湯川の声「一番下の番号ですね？」
真央の声「そうです」
テレビに釘付けになっていた堅一、慌て
てスマホを取出しテレビ画面を写真に撮
ろうとするが、画面にヒビが入っている
のを見て、店の奥に向かい、
堅一「すいません！紙とペンください！」
店員に声が届いた気配はない。
真央の声「もし継続して使用された場合、自
然発火の恐れもあるとの事です」
湯川の声「それは怖いですね、でも会社側が
取り替えてくれるんでしょ？」
真央の声「はい、無償で新製品との取り換え
を実施するとのことです」
湯川の声「それはむしろお得ですよね」
堅一、画面と店の奥を交互に見る。

真央の声「以上、マクレーン社からのお知らせでした」

画面が切り替わる。

堅一、慌てて店を飛び出す。

○堅一の部屋内

堅一が慌てた様子で帰宅する。

堅一、居間に駆け込みテレビをつける、チャンネルを次々に変えていくが、マクレーン社のニュースは無い。

スマホを取出し、割れた画面で検索しようとすると、０９０からの着信。思わず通話ボタンをタップしてしまう。

堅一「・・・もしもし」

電話の向こうから赤嶺の声。

赤嶺の声「もしもし、頼我賢一様の携帯電話で宜しかったでしょうか？」

堅一「えっと、あの・・・」

赤嶺の声「・・・もしもし？」

堅一「はい、あの、頼我です、誰ですか？」

赤嶺の声「私、以前、冷蔵庫の修理に行かせて頂きましたマクレーン社の赤嶺と申しますが」

堅一「あ！はい！」

赤嶺の声「お話がありまして一昨日くらいからお電話させて頂いておりまして」

堅一「はい！何ですか！？」

赤嶺の声「頼我様のお使いの冷蔵庫がですね、ええ、この度の・・・」

堅一「・・・」

スマホを耳に当てたまま立ち尽くす堅一、冷蔵庫に目をやる。

○ダイニングバー『小悪党』厨房内（夜）

流しで皿を洗う堅一の目は虚ろ。度々、手が止まる。

フロア側から岡島が顔を出し、何度か声を掛ける。

岡島「堅一…堅一！」

堅一、我に返り、

堅一「あ、はい！」
岡島「またお客さん来てる」
堅一「あ、はい・・・」
堅一、フロアに出て行く。

○同・店内フロア（夜）
カウンターに太助の姿。
堅一、太助に近付く。
堅一「・・・何だ？」
太助「頼みがある」
堅一「・・・」
太助「今晩、部屋貸してくれ」
堅一「・・・は？」
太助「もうすぐ、あいつがここに来るからさ」
堅一「あの男か？」
太助「しこたま飲ませて、女と寝てるとこ見せりゃ、母ちゃんだって諦め付くだろ」
堅一「・・・お前、まさか美空ちゃん使うんじゃないだろうな？」
太助「・・・馬鹿野郎」

店のドアが開き、愛が入って来る。

愛「どうも、ご無沙汰してます」

堅一「・・・」

太助「名刺貰っといて助かったわ」

堅一「お前、意外にワルだな」

太助「誰の弟だと思ってんだ」

愛、太助の隣に腰を下ろし、

愛「・・・ここで！？」

太助「まさか、ちゃんと部屋はありますよ」

堅一「まだ貸すとは言ってない」

太助「借りる」

堅一「・・・」

太助「俺が決めた」

堅一「・・・」

太助「これが俺のやり方なんだ」

堅一「・・・」

太助「・・・」

堅一「・・・どうすりゃ良い？」

○堅一の部屋内（深夜）

堅一が帰宅する。今脱いだ靴を持ち、真っ直ぐ押し入れに向かうと、鞄と靴をしまう。

台所へ戻って来ると、冷蔵庫の中から缶ビールを一本取出し、飲み始める。

堅一「缶ビール冷えてるよ・・・キンキンだよ・・・美味いよ・・・・」

堅一の目に涙が溜まる。

堅一「テメェのお陰でよ・・・缶ビールが美味いよ・・・畜生・・・・」

堅一、泣き出す。

堅一「畜生・・・畜生・・・畜生・・・・」

堅一、力の入らない拳で冷蔵庫を叩く。

叩いて、叩いて、叩き続ける。

堅一「俺には・・・俺には、こんな・・・・缶ビールを冷やす事なんか出来ない・・・・こんな美味い缶ビールを・・・誰かに・・・・」

握られていた堅一の拳が徐々に開き、冷蔵庫を撫で始める。

堅一「何とか言ってくれよ・・・・頼むよ」

堅一、冷蔵庫に抱き着く。
堅一の足元でスマホに着信、画面には
『頼我太助』の表示。
堅一、着信に気付かず。
堅一「悪かった・・・俺が悪かったよ・・・
マクレーン・・・聞いてくれよ・・・マク
レーン・・・」

○住宅街・道中（深夜）
千鳥足で歩く武山が隣を歩く愛に抱き着
く。
愛「もう、巌さん早い～お家もうちょっとだ
からぁ～」
武山「もうちょっとぉ～？そしたら巌さんも
っと元気になっちゃうよ～？」
愛「うふふふ、楽しみ～」
二人からやや距離を置いて歩いている太
助、スマホを耳に当てて焦りの表情。
太助「何やってんだよ、馬鹿兄貴・・・」

○堅一の部屋内（深夜）

堅一、冷蔵庫に抱き着いたまま泣きじゃくっている。

堅一の足元では、スマホが着信を続けている。

堅一「マクレーン・・・マクレーン・・・」

○アパート前・外観（深夜）

武山と愛が抱き合いながら鉄階段を上がって行く。

太助、少し離れた所でスマホを耳に当てながら武山と愛が堅一の部屋に迫るのを目に留める。

太助「駄目だ・・・畜生」

電話の向こうから、マクレーンの声。

マクレーンの声「あかん、あかん堅一、お前もうスタンバイせい！スマホここ置いて行けアホ！あ、もしもし？」

太助「もしもし兄貴！？もう部屋の前だ！」

マクレーンの声「あ、堅一くんは大丈夫です」

太助「誰だお前！？」
マクレーンの声「あ、マクレーンです」
太助「誰っ！？」
マクレーンの声「お兄様のことはお任せ下さい！ほな！さいなら！」
太助「誰なんだ、お前はーっ！？」
通話が切れる。
太助が二階廊下を見上げると、武山と愛が堅一の部屋に入って行く。

○堅一の部屋内（深夜）
無人の部屋内に入るや否や、武山が愛に抱き着き、押し倒す。
愛「いやん、巌さん、お風呂は？」
武山「もう我慢出来ないよ！」
武山、必死な様子で服を脱ぎ、愛に覆い被さる。
愛「巌さん・・・巌さん・・・愛してるわ」
武山「愛ちゃん！結婚しよう！」
愛「巌さん、そんな！」

武山「僕には君しかいないんだ！」
マクレーンの声「オイ、コラ、オッサン！」
武山、我に返る。
武山「えっ・・・」
武山、周りを見回す。愛も不安げな表情。
マクレーンの声「こっちじゃ、エロ親父」
武山と愛、冷蔵庫に目をやる。
冷蔵庫の戸が独りでに開く。
愛「えっ・・・」
武山「・・・」
マクレーンの声「お前、こんな事して、どないなるか分かってんのか、コラ」
武山「・・・え」
愛「・・・え？」
マクレーンの声「オンドレ、舐めた真似しとったら、ホンマにイテまうどコラァァァ！」
ガタガタと動き出す冷蔵庫。
武山「うわあああ！」
愛「ぎゃあああああ！」
堅一、押し入れから飛び出す。

堅一「オンドレ、こらぁぁぁ！」
武山「うわあああ！」
愛「いやあああ！」
堅一、玄関の扉を開ける。
外から太助と恵が入って来る。
武山「え・・・・え！？」
恵、目に涙を溜めながら怒りの表情。
恵「・・・・てめえ！」
恵、愛に掴みかかる。
太助「その人違う！その人は悪くない！」
恵「こいつが一番、悪いだろうがよ！」
太助「説明する説明する！」
大わらわとなる頼我家の皆々。
その様子を眺める様に佇む冷蔵庫。

○病院内・分娩室外廊下
ベンチに座る恵と落ち着きがない様子の
太助。

○堅一の部屋内

台所で一人、料理をする堅一。
傍らに置かれた堅一のスマホが鳴る。画面には『母・頼我恵』の表示。
堅一、スマホを耳に当てる。
堅一「もしもし・・・ああ、そう、お疲れ様。うん・・・もう少ししたら俺も向かうから」

○アパート前・外観
二課愛の一番奥の部屋の扉が開き、堅一が出て来る。手には紙袋をさげている。

○病院内・分娩室外廊下
ベンチに座っている恵のもとへ、堅一がやってくる。
恵、堅一を目に留め、立ち上がる。
恵「男の子だって」
堅一「お疲れ様、顔見ないの？」
恵「最初はお父さん」
堅一「なるほど」
恵「あんた達の時と一緒」

堅一「・・・覚えてないけど」
恵「そりゃそうでしょうね」
笑い合う二人。
堅一、紙袋を恵に差出し、
堅一「これ」
恵「なに？」
恵、紙袋を受取って中を見ると、タッパーに詰められた二人分の弁当。
堅一「どうせ何も喰ってないんだろ？」
恵「太助は特にね」
堅一「昔からそうなんだよ、あいつ」
恵「渡しとく、ありがとう」
堅一「じゃあ、俺は」
恵「顔見せてあげないの？」
堅一「仕事あるから」
恵「夜勤でしょ、あなた？」
堅一「また連絡するよ」
恵「いつになるやら」
堅一、恵に手を振りながら去る。距離が開き、振り返り、もう一度手を振る。

恵、堅一に手を振り返し、しばらくして
から分娩室に入って行く。

○アパート二階廊下

自分の部屋の前に立つ堅一、目の前には
台車に乗った使い古した冷蔵庫。
部屋の中から赤嶺が出て来る。

赤嶺「設置終わりました、問題ないです」
堅一「ありがとうございます」
赤嶺「では、こちらは、お預かりします」
堅一「・・・・」
赤嶺「・・・・」
堅一「・・・・」
赤嶺「・・・・宜しいですか？」
堅一「・・・・はい、持ってって下さい」
赤嶺「はい、では、失礼します」
堅一、冷蔵庫に軽く蹴りを入れる。
赤嶺が台車を引き出す。
マクレーンの声「お前いつかシバく！」
赤嶺、堅一に振り返り、

赤嶺「え？」
堅一「・・・・いいえ？」
赤嶺「・・・・ああ、じゃあ、失礼します」
再び台車を引き出す赤嶺。
マクレーンの声「またなー！」
赤嶺、驚いた表情で堅一に振り返り、
赤嶺「ええ！？」
堅一、冷蔵庫に手を振りながら、
堅一「ありがとう！」
赤嶺「・・・・あ、どうも・・・・やっぱおかしい、あの人」
赤嶺、階段付近に待機していた作業員たちと四人がかりで冷蔵庫を降ろしていく。
やがて、冷蔵庫はトラックの荷台に積み込まれる。トラックが走り去る。
全てを見届けた堅一、部屋に入って行く。

＝了＝